鎌ケ谷市郷土資料館だより 第52号

目次

○収蔵資料展示 Vol.19『銃後の鎌ケ谷・終戦75周年記念展示』開催中……1
○ウィズ・コロナ時代の郷土資料館／郷土資料館この一品⑪……2～3
○史料整理の現場から①／資料館ホームページの紹介……4

「銃後の鎌ケ谷・終戦75周年記念展示」

～収蔵資料展示 Vol.19 開催中～

今年は、昭和20年（1945）に終戦を迎えてからちょうど75年の節目にあたります。

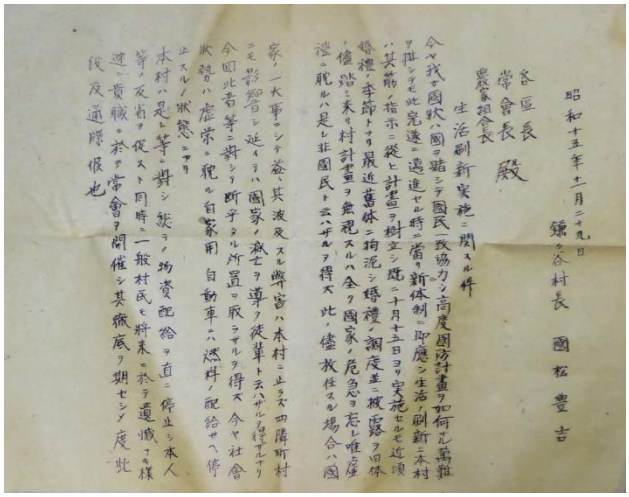
昭和12年にはじまった日中戦争、昭和16年にはじまった太平洋戦争では、多くの人が戦争に徴集され亡くなりました。市域でも200名近くの人が戦争に駆り出され、その多くが故郷である鎌ケ谷村から遠く離れた土地で亡くなっています。

一方で、村に残された人々も昭和13年に制定された国民の戦争協力を義務化させる国家総動員法のもとで、政治的にも経済的にも言論・行動を規制されていきます。

国家による規制は戦争が進むにつれ、次第に人々の日常生活にまで入り込んでくるようになりました。郷土資料館所蔵資料から、衣食住や冠婚葬祭などに至るまで細かく規制された戦時中の人々の生活を垣間見ることができます。

1階展示室で開催中です

例えば結婚式においては、鎌ケ谷村では資産などによって分けられた3階級ごとに式の金額や花嫁衣裳などが規制されました。



「生活刷新実施に関スル件」（昭和15年11月29日）。披露宴などの金額の規制を破った場合には配給停止などの罰則が定められていた

しかし、ハレの場である結婚式では、この規制が破られることが少なくなかったようで、規制を破り豪華な式を挙げた人は密告などにより摘発され、罰則を受けました。

国家総力戦として戦争が遂行されていく中で、小さな村の個々人の結婚式にまで戦争が影響を及ぼしていたことがわかります。

このほかにも様々な「銃後の鎌ケ谷」の様子を記した資料を展示してあります。8月15日には75回目の終戦記念日を迎えます。この機会に“戦争と鎌ケ谷”について展示で振り返ってみるのはいかがでしょうか。

ウィズ・コロナ時代の郷土資料館

～写真で見る入館から退館まで～

ウィズ・コロナ時代・・・。これからは日常生活と感染拡大防止対策を両立していかなければなりません。郷土資料館でも社会経済活動を継続し、皆さんが安心して利用できるよう様々な対策を講じています。そこで、この号では、皆さんが入館してから退館するまでの流れを写真で紹介していきます。

①郷土資料館へようこそ。マスクをお忘れなく！

②まず入口で、注意事項を確認しましょう。

③受付で手指の消毒をお願いします。

④コロナウイルス感染症対策のため、必ず入館者カードの記入をお願いします。

⑤体温は測ってきましたか？測ってこなかった方は、受付で検温させていただきます。

⑥館内は一方通行です。順路に従ってください。なお見学は30 分以内でお願いします。

⑦密集を避けるため、他の見学者との距離を空けましょう。床の表示を参考にしてください。

⑨手に取った図書類は、元の場所に戻さず指定の場所へお願いします。

⑩図書の閲覧や貸出、資料の複写サービス、刊行物の販売を行っています。窓口へどうぞ。

⑧展示物には手を触れないようお願いします。

⑪ありがとうございました。気をつけてお帰りください。

郷土資料館この一品⑪

梨　籠(なしかご)

鎌ケ谷市は県内でも有数の梨産地として知られています。８月になると出荷が始まり、直売所も見かけるようになります。今回は、この梨に関する資料を紹介します。

民具展示コーナーの住まいの道具と米づくりの道具の合間に、藁(わら)を葺(ふ)いた大小二つの籠があるのにお気づきになった方はいますか？これが今回紹介する梨籠です。

竹と藁でできた梨籠

鎌ケ谷での梨づくりは、江戸時代末期に中沢村ではじまったといわれています、明治～昭和の初めにかけては中沢地区の一部で行われている状態でしたが、太平洋戦争後に市域全体に広まったようです。

梨は、現在では輸送や販売時には段ボール箱に詰められていますが、明治から昭和３０年代半ばまでは梨籠（稲や麦の藁で覆い、縄でしばった竹製の籠）に入れて運んでいました。昭和２０年代末までは山盛りに６貫目(約２２kg)詰められていましたが、トラック輸送が主体になると、籠の深さ(約３０cm)に合わせて４貫目(約１５kg)を詰めるようになりました。昭和３０年代後半に段ボール箱が主体になると梨籠は姿を消していきました。

【追記】前回⑩『板碑』の補足説明

万福寺境内遺跡の板碑が散乱して発見されたわけを説明します。

戦国時代後期には、板碑は造立されなくなり、信仰の対象とならなくなりました。

万福寺境内遺跡は、戦国時代後期以後、明治初期まで墓域として使用されていたため、墓づくりの中で板碑は邪魔物として投げ捨てられ、散乱していったと推測されることから、説明の中で「廃棄」という表現を使いました。

【史料整理の現場から①】

芳野金陵の書

昨年 11 月、鎌ケ谷地区のある旧家所蔵の史料調査をしたところ、蔵内で保管されていた史料から、ある一幅の掛軸が発見されました（**写真**）。

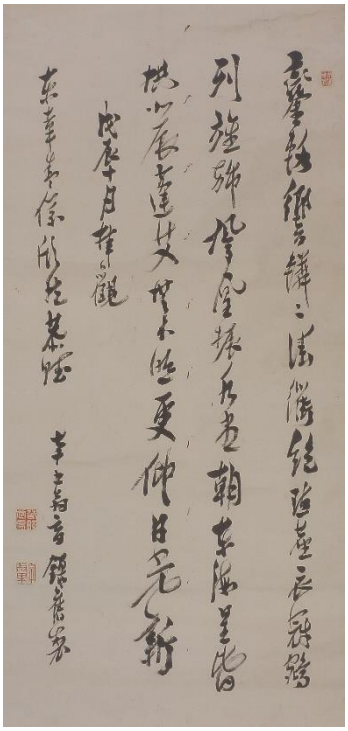
漢詩の書を軸装したもので、109.5×53.5 cm ほどの本紙に（表装を含めた全体は約 176×66.5 cm）、３行にわたって詩が記されています。

解読に困難を伴う中、２つの落款（作者の姓名・号などを記した印）を手がかりに作者について調べてみると、陰刻で「芳野世育」、陽刻で「字叔果」とあるのは、前者「世育」が芳野金陵（よしのきんりょう）の名、後者「叔果」がその字（あざな）であり、この書が幕末維新期の儒学者・芳野金陵（享和 2〈1802〉-明治 11〈1878〉年）の手によるものであることがわかりました。

仮に翻刻を掲げると、次のようになります。

鑾輅響鱗々街衢絶随黄衣冠鶴
列旛旆鳳凰振水尽朝東海星皆
拱北辰蓬艾無不然更仰日光新
**　戊辰十月拝観**
東幸盛儀欣然恭賦　七十五翁育録旧製

「鑾輅響鱗々街衢…〔鑾輅（らんろ）鱗々（りんりん）街衢（がいく）に響き…〕」とはじまるこの漢詩は、「戊辰十月拝観　東幸盛儀」、つまり明治元年 10 月に行われた東京行幸で明治天皇が江戸城に入城した際、天皇の車（鑾輅）が「江戸」から「東京」へと改称された街中をゆく様を詠んだもので、「欣然として恭しく賦する」とあることから、よろこびをもって、つつしんで作られたものであることが読み取れます。また、「七十五翁育、旧製を録す」とあるように、金陵 75 歳の時（明治 9 年）、当時作った詩を改めて記したもので、晩年の書の一つであると思われます。



金陵は現在の柏市松ヶ崎の出身で、幕末期に江戸幕府の学問所（昌平黌）の儒官を、維新後も新政府に引き継がれた昌平学校で教官を務め、明治 3 年に退官した後も漢学塾を開くなど、生涯を通じて多くの門人を育てました。市域本多氏領の粟野村・佐津間村・中沢村・道野辺村の領主であった田中藩主にも仕官しており、三男の芳野桜陰（おういん）もまた、田中藩校日知館（にっちかん）や学問所の教官を務めました。

金陵の門下からは久坂玄瑞（くさかげんずい）をはじめ、幕末維新期に国事に奔走した勤王の志士たちも多く出ています。佐津間村出身の草莽の志士・渋谷総司もまた金陵に師事し、その子桜陰とともに諸国を回ったと伝わります。

このように市域との繋がりを少なからずうかがわせる金陵の書ですが、伝存の経緯を含め、詳しくはまだわかっていません。広くご教示をいただければ幸いです。

面白い記事が盛りだくさん！

～郷土資料館ホームページの紹介～

現在、郷土資料館ホームページ中の「郷土資料館からのお知らせ」コーナーでは「郷土資料館って何をするところ？」というシリーズを掲載中です。普段は展示できていない資料の紹介などを行っています。ぜひご覧ください。

鎌ケ谷市郷土資料館だより　第５２号　令和２年８月 15 日発行　　編集・発行：鎌ケ谷市郷土資料館
住所：〒273-0124　鎌ケ谷市中央 1-8-31　Tel：047-445-1030　Fax：047-443-4502
メール：kyodo@city.kamagaya.chiba.jp
ウェブサイト：http://www2.city.kamagaya.chiba.jp/sisetsu/kyoudo_2/index.html